

果樹試験場うめ研究所成果発表課題 要約

1. ウメ剪定枝チップを利用した燻製商品について

(工業技術センター 食品開発部 部長 前田拓也)

ウメ剪定枝のチップサイズは、3 か月程度の自然乾燥後に細断処理を行うことにより市販チップと同じ主分散(2.0~3.35mm)が得られた。市販サクラチップの燻煙成分を基準として比較すると発生量は異なるが代表的な香り成分は全て認められた。シクロヘキサノールに対する相対値で燻煙成分量を比較すると1mm以下のチップサイズでは、ベンズアルデヒドの発生量が2倍以上になった。基部、先端部、樹皮から調製されたチップを作製し燻煙成分量の比較を行うと、先端部が基部よりも燻煙成分量が多くなった。

2. 露茜の大玉果生産のための摘果方法

(うめ研究所 研究員 綱木海成)

「露茜」の小玉果は追熟しても十分赤くならず、2022年度からはS級果は出荷することができない。そこで、S級果比率の低減に効果的な摘果方法を明らかにするため、摘果程度や時期の違いが果実肥大に及ぼす影響を調査した結果、「露茜」のS級果を減らすためには、4月上旬に枝上の果実が5cm間隔となるように摘果することが適当であることが明らかとなった。

3. 温暖化に対応した梅干の高品質化技術の開発

(うめ研究所 主査研究員 田嶋皓)

ハウス干しを行う梅干の過剰な日焼けや、果皮の赤色化を抑制するため、ハウスにおいて、遮光、遮熱シートを利用して干し上げを行ったところ、干し上げ日数は延びるものの、70%以上の遮光で果皮の赤色化の軽減に一定の効果があることが明らかとなった。

4. クビアカツヤカミキリによる被害状況と薬剤の防除効果について

(うめ研究所 研究員 裏垣翔野)

近年、特定外来生物クビアカツヤカミキリの発生が深刻な問題となっている。樹幹散布を想定した本種の防除に有効な薬剤を検討した結果、モスピラン顆粒水溶剤2000倍で高い殺虫効果が、アグロスリン水和剤2000倍で高い産卵抑制効果が認められ、防除に有効であると考えられる。

5. ウメの病害について

(うめ研究所 主任研究員 菱池政志)

黒星病に対する薬剤の残効性はデランフロアブルが最も長かった。すす斑病に対して、ナティーポフロアブル、ペンコゼブフロアブル、パレード15フロアブルがスコア顆粒水和剤と同等以上の防除効果であった。これらを考慮して作成した防除体系の黒星病およびすす斑病に対する防除効果は高かった。

6. 低樹高でコンパクトなムカデ整枝樹の現地実証

(JA 紀南中央営農経済センター 営農指導員 前川実)

平成 23 年度より関係機関とともに現地実証に取り組み、ムカデ整枝樹は低樹高かつ樹容積がコンパクトであるため、管理作業の省力化につながり、計画密植と摘心処理の追加により早期成園化につながることが確認できた。現地普及に向け、実証園を活用した栽培講習会や優良園地の視察研修等を継続的に実施しており、令和 5 年 12 月時点で導入面積 30 a、実践農家 4 戸であるが、今後新たに導入を検討している農家もあり徐々に面積拡大しつつある。